

「腹立つなあ。正美のやつ」

ソファの端に座った慶士が、憤然と文句を言う。なぜ端かといえば、真ん中に我がもの顔で琥珀が寝そべっているからだ。

いくらどけと言っても、スルーされる。それどころか、慶士の腿に前脚と顔をのせて枕扱いするふてぶてしさときた。どこまでも、主人そっくりな凶々しさである。

「あいつは、おれのことなんだと思ってるんだ」

そう。今朝、正美とアシスタントたちは二週間の予定で海外へと旅立った。その名目は慰安旅行なのに、慶士のみ留守番を言いつけられたのだ。

無論、旅行に行きたいわけではない。むしろ、ひとりのほうがずっと平穩だ。とはいえ、正美のあまりの言い草に一番慰安が必要なのは自分だと言い張った。なにせ、花の勉強の合間にBLワールドに浸からされて疲弊しきっている。しかし、正美は笑顔で却下した。

「じゃあ、琥珀に癒されて」

「は？」

「動物セラピーね。琥珀の世話もできて一石二鳥だわ。それに、旅行先では素敵なホテルに泊まるし、美味しい料理も食べにいくから、アシスタントのお兄ちゃんはいらないの。だから、お留守番よろしくね」

なにがどうして、だからなのか、まったく理解不能だ。おそらく、何人たりともわかるまい。どんな名刑事でも名探偵でも、真実にはたどり着けないだろう。

珍妙すぎる作家脳は、思考回路が複雑怪奇を極めた。

理不尽な仕打ちだが、結果的に正美に逆らう勇氣はなかった。せめてもの抗議が、見送りをしないというささやかな反抗で情けない。お土産は買ってきてあげると言われても、ちっともうれしくなかった。

琥珀を相手に正美の文句を言っていたら、インターフォンが鳴った。

のそりと顔を上げた琥珀がソファから下りた。そのまま、玄関へ向かう。己の縄張りへの侵入者をたしかめたいのだと思うが、いかにも怖そうな大型犬に出迎えられては来客が気の毒だ。

モニターで相手を確認する間もなく、慌てて先にドアへ走り寄る。鍵を解除してドアを開けた途端、見慣れた長身を視界に捉えて驚く。

「那智くん、どうしたの？」

眼前に、本日も洒落た装いの高木がいた。ただし、スーツではない。いつもより、いくぶんカジュアルないでたちだがカッコいい。でも、なぜか大きめの鞆も持っている。

「海老原に、留守中の慶士さんを頼まれた」

「え」

「二週間、世話になるんでよろしく」

「へ！？」

ぽかんとする慶士に目を細めた高木が、ふと玄関脇の飾り棚を見遣った。つられて慶士も顔を向ける。そこには、定型外の茶封筒があった。『那智先輩とお兄ちゃんへ』と、正美の字で宛名が書いてある。

おもむろに、彼が中を覗いた。直後、にやりとほころんだ端正な口元に嫌な予感がする。

茶封筒から高木が取り出したのは、正美の最新刊だった。あろうことか、本当に高木と慶士をモデルに描いたBLコミックだ。それを見た慶士が「ひっ」と悲鳴を漏らす。

「手紙も入ってる。『那智先輩、兄をよろしく願います。ちなみに、このマンションは防音です』か。なるほど」

正美の馬鹿たれ。なんてことをするんだと内心で大絶叫した。

冷や汗をかきつつ後ずさろうとした慶士の腕を、高木が掴む。離せと抗ったがままならず、居間のソファに連行された。

こういうときに限って、琥珀もソファにのぼってこない。少し離れた位置におとなしく伏せている。

あれよあれよという間に、背後から抱きかかえられた格好で、彼の腕の中に閉じこめられた。

「ななな那智くん、なにするんだよっ」

「俺たちの初記念本を朗読？」

「うぎゃあ！」

なんの記念だ。恐ろしいと喚く慶士の耳元で、生アフレコ地獄が繰り広げられた。

声優ばりにいい声なのがいたたまれない。涙ぐみ、めいっばい嫌がる慶士の耳朶や首筋を、高木が甘噛みする。

「やだ……那智く……っ」

「ココ、硬くしてるくせに？」

「ひうん」

コミックをローテーブルに置いた彼に股間を撫でられて呻く。誰のせいだと顔だけ振り向いたら、唇を塞がれた。

無理な体勢が苦しくて、眉をひそめる。すると、長い腕が軽々と慶士の身体を反転させた。つまり、高木と向かいあう格好でその腰を跨いで座らされたのだ。

「んんっ」

再び、濃厚なキスが始まった。口内を舐め尽くされ、舌も絡め、唾液も飲まされる。舌を引き摺りだされて口外できつく吸われたりもして、息も絶え絶えだ。

気づけば、下半身を裸に剥かれていた。頬を朱に染めて、慶士がうろたえる。

「な、那智くん、まさかここで！？」

「海老原の原作に従おうかと」

「…正気ですか。ていうか、元はおれたち！」

「どっちでもいいが」

「よくな……んむっ」

突如、口中に高木の指を含まされた。人差し指と中指の二本だ。何事だと不明瞭な言葉で詰ると、潤滑剤がわりに濡らしてと淡々と言われて倒れそうになる。

抜群に爽やかな美貌でのエロ発言は、いつ聞いても心臓に悪かった。

若干、遠くを見る目になりかけた瞬間、口から指が引きぬかれる。すぐに、双丘の狭間へ指が滑りこんできた。

咄嗟に身を振ったけれど、慶士を膝にのせたまま彼が軽く脚を開いた。必然的に慶士の脚も開いた状態で固定され、秘処も無防備に晒される。

唾液をまとった指先の挿入に、唇を噛んだ。

その途端、唇を舐められる。低音で息を詰めるなど窘められ、色っぽい声で啼いても囁かれた。

どんなに恥ずかしがって抗っても、長くはもたない。元々快樂に耐性がほぼなく、さらに高木の手で変えられた肉体は陥落も早い。弱い箇所を数回こすられただけで降参だ。

「あ…っああ、ん…や」

逞しい首に両腕でしがみつき、もういきたいと懇願する。まだと焦らされ、性器の根元を縛められて泣いた。

散々後孔をほぐされ、指がぬかれる頃には、慶士はすでにぐったりしていた。だから、下肢の衣服を寛げた彼の屹立上にのせられたときも、ろくな抵抗すらできなかった。

「ひゃう」

「く。毎度、よく締まる」

「ふ、あ…んんんっ」

痛みはないが、圧迫感と充溢感がすごい。それに、自らの体重でより深く高木を迎え入れて惑乱した。にもかかわらず、彼は慶士の双丘を割り広げて容赦なく突きあげてくる。

「や…ん、あ、あ、あっ」

縛めをとかれた性器は、挿入の衝撃で達していた。

立てつづけの目眩めく濃い行為に、いつものごとくついていけない。ただ泣きながら、高木に翻弄される。そして、ひととき最奥を抉られ、かすれた悲鳴をあげた。

「っは…あ、あ…」

同時に、首筋へ噛みついた彼も低く呻いた。腰の奥深くが勢いよく濡れていく。なんとも言い難い感触に身を震わせた慶士が、広い胸元へ倒れこんだ。浅い呼吸を繰り返す唇が、優しく啄まれる。

徐々に理性が戻ってきて、羞恥で眩暈がした。日常スペースで性行為だなんて、破廉恥すぎる。ソファを汚さなかったのが奇跡だ。うっかり体液を飛ばそうものなら、正美に何を言われることか。

危ない橋を渡らせた高木を、慶士は恨めしげに睨んだ。

「こんなところでするなんて」

「原作どおりだろ」

「だからって！ ま、待てよ。うわ。この本のつづきが出たらどうしよう…」

不意に思いついた血も凍る想定に、愕然とする。怒りも忘れ果てて、縋るように見つめた先で、高木はあっさり言った。

「だって、海老原だしな。出すんじゃないのか？」

「はう」

「海老原にその気がなくても、読者の反応次第では、出版社側が続編を依頼するだろうし」

夢も希望もない返答に、慶士が嘆く。

「もし出たら、那智くん、また本と同じことしそうでやだ」

「ああ。するね」

「…確定って」

〇れいコンマ何秒という即答だ。涼しい顔でやる気満々の彼が微妙に怖い。

「おれは嫌なんだけど」

「あいにく、俺は楽しい。慶士さんも、気持ちよさそうだったよな？」

「うう」

「まあ、提案型セックスってことで」

「て！？」

「斬新だろ。新鮮だし、マンネリ化も防いでいいんじゃないか」

「……やっぱり、この人、鬼だ」

涙目で緩々とかぶりを振る。そんな慶士に、美形の鬼はにっこり微笑み、甘い甘いキスをした。